

ギュルバカ演出 《ウェルテル》再演

タチアナ・ギュルバカの演出によるチューリヒ歌劇場のマスネ《ウェルテル》は、新演出での初演以降、題名役が変わるたびに観てきたが、7年目にしてようやく最適なテノールを得て、1月23日の再演で初めて正統に表現された。初演時はビョートル・ベチャワで強すぎ、次はファン・ディエゴ・フロレスでオーラがありすぎたが、今回のバンジャマン・ベルネームは完璧なウェルテルだ。母国語で歌う美しいフランス語と、無理のない柔らかなフランス的発声は、マスネの音楽も最大限に生かし、そして叶わぬ恋の苦悩に苛まれ、夢と現実の間にピタリとハマっていた。ときおり吹き出す情熱の表現は運命の愛を肯定させる。

ギエドレ・シユレキーテの指揮も、ベルネームの柔らかな声を生かす優しいフレージングだ。シャルロットのリハプ・シャイエブは立派すぎる声だが、夢見心地のウェルテルと対照的な、現実性の象徴としては効果的だ。物語もマスネの音楽的描写も、いままで浮いていた演出も、すべてが腑に落ちるすばらしい公演だった。

毎週エキサイティングな トーンハレでの公演

トーンハレの今季のクリエイティブ・チエア、ブライス・デスナーはバンドのギタリストとしても有名だが、その活動開始のきっかけとなった、姉に捧げるピアノ協奏曲をアリス・紗良・オットに託し、1月18日にトーンハレで世界初演された。ケント・ナガノが指揮するチューリヒ・トーンハレ管弦楽団はプログラム冒頭にアイヴス《答えない質問》を演奏し、美しい弱音で現代曲への耳を整え、後半のマーラーも予感させた。静寂が包むホールに朱色の衣裳で元気に登場したオットは、このデスナー



ようやく最適のウェルテルを得た？ チューリヒ歌劇場の《ウェルテル》から ©Toni Suter

の音楽で、「生」への希求を炸裂させる。美しいメロディ・ラインと、現代的なドラマ性が迫ってきたかと思うと、第2楽章では夢のなかのような柔らかな音色も聴かせられる。もうこれはピアノ協奏曲というよりも、ピアノを使ったバフォーマンスだ。姉はダンサーというだけあって、ピアノストが音と踊っているような曲に、オットは「生」への凄まじい執着と覚悟を感じさせた。そのあまりの迫力に、休憩後のマーラー「交響曲第4番」は色あせて聴こえたほどだ。細部まで際立つ、軽めで優雅なマーラーは、前任のデイヴィッド・ジンマン音楽監督時代と対極のようなナガノのアプローチだ。音で情景を描き、まるで舞台装置が見えてくるような表現力だが、森の精のような衣裳を着たソプラノのマリ・エリクソモーンの言葉が不明瞭で、音楽的精度を保てずに終わってしまった。

続いて1月21日には現音楽監督のパウ・オ・ヤルヴィが手兵のエストニア祝祭管弦楽団を連れてきた。前回のツァー時、今回も完売のホールに、エストニアが誇るアルヴォ・ペルト「交響曲第1番《ポリフォニック》」が響く。マキシミリアン・ホルヌングを招いたドヴォルジャーク「チェロ協奏曲」は深い音が光るが、どこかギクシャクしている印象を与える。アンコールでのJ・S・バッハも奇をてらいすぎ、それがこの楽団の色から浮いてしまっているのか。休憩後のシオスタコヴィチ「交響曲第1番」は、自然体に戻りながら、現在の不安定な時代を映し、彼らの祖国の歴史的背景からくる真実味があり、第1楽章後に自然に拍手が湧いたほどだ。

1月24日にはスイス人指揮者の出世頭フィリップ・ジオルダンが13年ぶりに故郷チューリヒのトーンハレに凱旋客演した。改装前のトーンハレを物心ついたところから知っているジオルダンにとっては、まったく違う響きになったトーンハレに慣れるまでに時間を要したというが、本番では、彼が以前の音響を「コンパクトで乾いた響きだった」と描写した通りの、シユーマン「交響曲第3番《ライン》」に仕上がっていたのが興味深い。ロマン派の要素よりもドイツの硬さが強調され、だからこそライン川が目の前に広がっているような錯覚を覚える。それが休憩後のワグナー「ニーベルングの指環」のライン川にまでつながっていく。ジオルダンが「組曲」のように構成したと語る後半は「組曲」のように構え、インへの旅で深く、落ち着いたアプローチを聴かせる。彼のワグナーは決して恍惚感に震えることはなく、正統な騎士的劇性を表現する。《ジークフリートの葬送行進曲》につながった流れがうねらせながら「ブリュンヒルデの自己犠牲」で終結するが、アーニャ・カンベの発声に限界を感じて楽しめなかった。一昔前のワグナー歌いのように、大きな口で叫ぶが声は飛ばない。しかしジオルダンはカンベを起用することが多く、次もベルリンで《指環》の共演が待っているそうなので、問題視していかないのかもしれない。少なくともチューリヒ歌劇場の《指環》でカミツラ・ニールンドの、どんどん伸びていく声を聴いてしまった聴衆には聴きづらかっただろう。全曲暗譜で隅々まで掌握していたジオルダンはさすがサラブレッドだ。ウィーン国立歌劇場との契約終了後は交響曲に力を入れるという。2025年12月にもトーンハレに戻ってくるというので楽しみだ。